

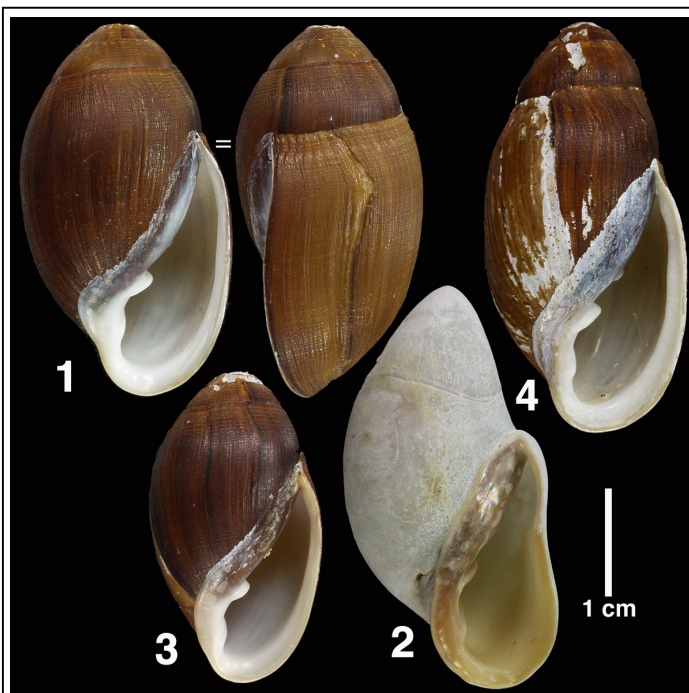
オカミミガイ *Ellobium chinense* (Pfeiffer)

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地内に分布する。県内ではヨシ原湿地が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。現在、健全な個体群は汐川干潟(図 1)、矢作川河口域(図 3)でのみ保存されている。近年堤防改修工事で生息地が消失することが多く、生息基盤は脆弱であり、絶滅の可能性が高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 35 mm で日本産オカミミガイ科としては最大種。殻は卵形で、殻表は褐色の殻皮で覆われる。県内でも場所により殻の大きさに差異がある。庄内川河口の個体群は大型(図 4)、矢作川河口の個体群は小型(図 3)である。老成個体は著しく殻口が肥厚し、殻皮だけではなく殻表の彫刻も失われている(図 2)。



1, 2 (老成個体)：豊橋市汐川干潟, 1988 年 5 月 1 日, 3: 西尾市矢作川河口, 2009 年 7 月 15 日, 4: 名古屋市庄内川河口, 2016 年 4 月 7 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)では 3 カ所で生息を確認し、その後新たに 2 カ所で生息を確認した(木村, 1999)。しかし、汐川干潟以外では生息確認個体数がそれぞれ 5 個体以下で、絶滅が危惧される。2002 年に渥美半島三河湾流入河川河口部で新たに生息地を確認したが、個体数は非常に少なかった(木村・木村, 2002)。2001 年の調査で矢作川河口域に 1 カ所新たに生息地を確認し、その後の継続調査で健全な個体群の存在が確認された(木村, 2012b)。また名古屋市庄内川河口の非常に狭い範囲で少数個体が採集され、名古屋市としては 70 年ぶりに本種の生息が確認された(木村, 2010)。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸。国内では東京湾(絶滅)、三浦半島(絶滅)、三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、玄界灘、伊万里湾、有明海、八代海に分布する(木村, 2012a; 木村, 未発表資料)。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地内の、朽ち木や落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで破壊され、生息地が著しく減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地と連続する上部の陸上植生を保全する。

【特記事項】

千葉県(2000)では絶滅生物にランクされている。

【引用文献】

- 木村昭一, 1999. 佐奈川河口域観察会報告. かきつばた, (25): 14-17. 名古屋貝類談話会.  
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54: 44-56.  
木村昭一・木村妙子, 2002. 新堀川河口塩性湿地の貝類相. かきつばた, (28): 13-14. 名古屋貝類談話会.  
木村昭一, 2010. オカミミガイ, p. 193. in: レッドデータブックなごや 2010 (2004 年版補遺), 316pp. 名古屋環境局.  
木村昭一, 2012a. オカミミガイ, p. 95. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.  
木村昭一, 2012b. 矢作川ヨシ原塩性湿地の貝類相. 三河生物, (3): 1-8, 2pls.  
千葉県, 2000. 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック動物編. 438pp.

(木村昭一)